

「運命は無理でも人生なら変えられる」

病室から分身ロボに魂を宿し 9/7(日) 14:00 配信

朝日新聞



[ようぽんさんが操縦し、パイロット講演会で講師を務めたオリヒメ＝ようぽんさん提供](#)

視覚に障害がある人も、そうでない人も楽しめるよう工夫されたウェブサイト「thousand smiles(サウザンスマイルズ)」。

今年3月、タニタのグループ会社が運営しているそのサイトに、3本の記事がアップされた。

「真っ暗闇ではなく、想像したカラフルな世界を。目の見えない精神科医が、色鮮やかに紡ぐいま」「人生は発想しだい！ 福場将太の生きるヒント」「福場将太とドラえもん『だから僕は、僕の道に飛び込んだ！』」

いずれの記事も、「目の見えない精神科医」として著書もある、福場さんへのインタビューだ。医学部5年生の時に網膜色素変性症と診断されたことや、視力を失って気づいたこと。大好きなドラえもんから学んだことから、生きる上でのヒントまで、計約1万1千字で記されている。

写真は、インタビュー中の福場さんの様子や、手土産として持参したドラえもんのお菓子などを使用。記事の筆者が、福場さんが勤めている北海道美唄市のクリニックを直接訪ねたことが伝わってくる。ただし、この記事には筆者の署名がない。

理由は、この記事に「ある秘密」が隠されているからだ。それは、筆者が遠隔操作ロボット「OriHime(オリヒメ)」を使って取材したこと。「パイロット」と呼ばれる操縦者は、富山県の病院に入院中の「ようぽん」こと、松原葉子さんだ。幼少期から進行性の難病である筋ジストロフィーとともに生き、2017年に気管切開をして人工呼吸器を装着。

そんなようぽんさんに代わって、サウザンスマイルズの編集者がオリヒメを手に美唄へ。カメラやマイクを搭載したオリヒメを通じて、ようぽんさんが取材した。

とはいえ、取材先の選定やアポ取り、手土産選び、そしてインタビューから執筆に至るまで、オリヒメを運ぶこと以外は、ほぼようぽんさんが担当した。

3本目の記事は、こんな言葉で結ばれている。

◇ 書籍の最終章に、福場先生の座右の銘でもある言葉があります。「運命は変えられなくても、人生なら変えられる」と。福場先生のご著書は、進行性の難病とともに生きるわたしにとっても多くを語りかけられました。まだまだできることがあるよ、人生はもっと面白くなるよ、と。自分の道を見失いそうになるとき、暗闇に一人うずくまってしまうとき、福場先生の書籍を通してやわらかな光がさしこんでいきますように。お読みくださったみなさんの心もまた、じんわりあたためられますように、そっと願いつつ。

■クリスマスコンサートのリハーサルで

富山県出身で、横浜にある大学で音楽を専攻していたようぽんさん。オルガン奏者としてCDを2枚リリースしている。大学卒業後、富山に帰郷したところから歩くことが困難になり、車椅子を使い始めた。

8年前に肺炎から呼吸不全となって救急搬送され、気管切開をして人工呼吸器を装着。その後、「富山県リハビリテーション病院・こども支援センター」に転院した。

移るにあたって、病院側に二つのお願いをした。教会の礼拝に行くための外出許可と、院内にリードオルガンを置かせてもらうことだ。許可を得て設置したリードオルガンは、今も毎朝のように演奏している。

数年前、その音色を聴いた看護師から「クリスマスコンサートをしませんか？」と提案があった。快諾して、前日にエントランスホールでリハーサル演奏をしていた時のこと。ストレッチャーで運ばれていた患者の1人が「ブラボー」と声を上げた。その人は手を動かすことができないため、両ひざをぶつけるようにして「拍手」をしながら、こう言った。

「生きててよかった」その言葉を聞いて「私の方こそ、生きててよかった」と心から思った。ささやかであっても、この喜びを抱きしめて生きていけたら、どんなに幸せだろうか。この経験があつてからは毎朝、聴いてくれる人の存在を感じながら演奏している。

■オリヒメの「公認パイロット」になって

そんなようぽんさんがオリヒメの「公認パイロット」になったのが、22年1月。オリヒメを開発したオリィ研究所が運営する「分身ロボットカフェ DAWN ver.β」(東京都中央区)で働き始めた。働くといっても直接出勤するわけではなく、富山の病院にしながらオリヒメを遠隔操作して接客する。

身ぶり手ぶりのモーションをつけながら歌ったり、訪日外国人と英語で会話したり。

パリで開催されたイベントにオリィ研究所が出展した際は、オリヒメを通じて「オー・シャンゼリゼ」の歌声を届けた。オリヒメを「扉」にして、あちこちワープして活動しているような気持ちになる。その原動力は、7年を超える入院生活の中での患者仲間との交流だ。

人工呼吸器を付けていたYさんは「病院の外の世界とつながっているのは、お母さんと電話している時だけ」と話していた。37年間入院していたKさんは「このまま病院で人生を終えたくない」と退院し、1年間のひとり暮らしを実現させて生涯を終えた。もし、この人たちがオリヒメのパイロットになっていたら、たくさんの人を楽しませることができたし、いろんなつながりができたはずだ。「私たちは何もできない存在じゃない」自らの活動を通じて闘病中の患者に、医療関係者に、世間の人たちに、そのことを知ってもらいたい。

ただし、「ようぽんだからできた」とは思ってほしくない。誰であっても、どんな状況であっても、テクノロジーの力を借りることで「できない」を変えることができる。100%の「できる」にならなくても、パーセンテージを上げることはできる。○か×かの二者択一で考えてしまいがちだけれど、△でもいい。まずは可能性に気づいて、一歩を踏み出すきっかけになれば、と思っている。

■社会とつながり、希望を伝えて

精神科医の福場さんへのインタビュー記事 3 本すべてが公開された翌日。

サウザンスマイルズに、こんなタイトルの記事が配信された。「遠隔就労の、あたらしいかたち。OriHime ライターによる記事作成の裏側」

ようぽんさんが書いた記事も含めて配信済みの計 11 本が、障害がある当事者がオリヒメを遠隔操作して取材・執筆したものだった、と種明かしをする記事だ。

商品レビューから座談会、インタビュー記事、発表会参加リポートまであることを紹介する記事の中で、ある一文に目がとまった。サウザンスマイルズの代表で、美唄に行った編集者でもある須永恵理さんの言葉だ。

「こうやって補い合いながら仕事ができる時代に生まれたこと、テクノロジーがそれを手助けしてくれたこと、そしてそれを可能にしたのは人であること。どれかひとつ欠けても、この企画は成立しませんでした。この時代だからこそ実現できた取り組みです」

読み返すうちに、目の前がにじんで見えなくなった。1 人で取材してしまえば簡単なのに、二人三脚で記事を書かせてくれたこと。同じものを見て、同じ話を聞きながらも、それぞれ違う感じ方をして、それを掛け合わせて記事にできたこと。「今回の取材は『愛のある分業』だったんだ」と感じた。

将来、自分は病院を出ることができるかもしれないし、できないかもしれない。もしも病院が生涯の拠点になったとしても、自分らしく自分の人生を輝かせたい。今いるこの場所から、オリヒメを通じて社会とつながり、希望を伝えていきたい。毎朝、思いを込めてリードオルガンを奏でる時と同じように。これからもオリヒメに魂を宿し、新たな出会いと発見を重ねていきたい。

若松真平・朝日新聞社